

金融規制と為替市場

「Once a dealer, always a dealer」世界の為替ディーラーの親睦団体 ACI の標語だ。彼らの所属先は銀行やその他の金融機関だったりするが、為替ディーラーとしての仲間意識は強い。団体の会員は所属企業でなく、個人の資格だ。

先週末、世界大会の集まりがシドニーであった。交流を深めることが主だが、市場の課題なども議論する。今年は為替レートのフィクシングの問題に関心が集まるのは無理もない。顔見知りの銀行ディーラーがこの件で解雇や停職を余儀なくされた者も少なくないはずだ。

こうした交流がその後の情報交換や取引に役立つ。その日の市場の需給、大口の取引動向、当局の政策の変化の可能性、経済指標の予測とポジションの積みあがり具合など、親しくなるとかなり突っ込んだやり取りになる。いろんな国のディーラーと情報交換をすればそれだけ市場の全体像に迫れる。

だが、フィクシングの問題で、今後は顧客に関する情報交換には慎重にならざるを得ない。物言えば唇寒し秋の風

「今日は M&A に関連したドル買いが石油会社から出るのだからはじめドルを買ったほうがいい」と他の銀行のディーラーとの情報交換の中で言うのはアウトになる可能性がある。銀行が談合して不当な値段で石油会社にドルを売る結果になると考えられるからだ。

しかし実際の市場はこうしたことの連続だ。市場の断面を静的に見ればこうした非難も成立するかも知れないが、それは事の本質とずれているのではないか。

あらゆる金融商品も当局の規制から逃れることはできないとの認識が欧米の規制当局の間では強くなり、金融危機の要因とは無関係な為替市場にまでその網が広がってきた。為替の先物のリスク比率を高め、その分自己資本の増額を求めるとの考えに至っては、実質的なリスク管理の向上ではなく、市場の発展を損なうだけだ。

「ウクライナ情勢の悪化で、円やスイスフランが避難通貨として買われたが、ノルウェークローネのほうがいいね。ノルウェークローネは、ユーロ危機のとき避難通貨としても評価されたし、何より原油価格との連動性が強いから」

フォレックスの大会で隣に座ったディーラーとこんな会話をしても問題はない。記録も残らないし。